神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 17 号

小 糸 遺 跡

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No.17

KOITO

神 奈 川 県 立 博 物 館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

Nakaku Yokohama Japan
1 9 8 8

神奈川県立博物館発掘調査報告書第17号

「小糸遺跡」目次

本　文

I. 調　査　目　的 …… 1

II. 遺　跡　概　要 …… 2

III. 遺構・出土遺物

遺　　構 …… 3

出土遺物 …… 5

IV. 調査前出土土器 …… 6

V. 調　査　所　見 …… 7

VI. 結　　語 …… 8

実測図

第１図. 小糸遺跡周辺地形図（昭和45年） …… 11

第２図. 遺跡周辺地形現状 …… 11

第３図. 遺跡位置概念図 …… 11

第４図. 調査地点全体測量図 …… 13

第５図. 調査前土器出土状態略図 …… 13

第６図. 第５トレンチ南壁面実測図 …… 15

第７図. 第１トレンチ東壁面実測図 …… 15

第８図. １号住居址・溝状遺構実測図 …… 17

第９図. ２号住居址実測図 …… 19

第10図. 土器実測図 …… 21

図　版

図版１. 小糸遺跡周辺地形（昭和43年）

図版２. (1) 調査地点全景　(2) 発掘調査状況

図版３. (1) １号住居址　(2) ２号住居址

図版４. (1) 溝状遺構　(2) １号住居址・溝状遺構切合状態

図版５. 土　器 (1) 弥生時代後期　壺形土器 1．小型浅鉢形土器 2

図版６. 土　器 (2) 弥生時代後期　土器破片 3 ～18.

図版７. 土　器 (3) 弥生時代後期　土器破片19～27.

図版８. 土　器 (4) 寄贈資料（弥生式土器・土師式土器）　A～D

調査主催者 …… 神奈川県立博物館

発掘担当者 ……
報告書執筆 ……
} 神奈川県立博物館
専門学芸員　神澤勇一

Ⅰ. 調　査　目　的

本遺跡の調査は、昭和43（1968）年、神奈川県藤沢市大庭字小糸在住の牛王重徳氏が弥生式土器１点と土師式土器３点を所蔵されていることを聞知したのが発端である。第６図および図版８に示す土器がそれで、いずれも父君の牛王貞雄氏所有畑地内より耕作中に出土し長らく同家に置いてあったと言う。たまたま同氏と本館職員川口徳治朗氏が友人の仲であった関係でそれが判り、土器はのちに本館に寄贈され、また牛王・川口両氏の調べで出土地点と埋没状態が或る程度確実に察知可能で、資料的価値が高い。

本館では開館以来、地域研究の基礎として発掘調査、各種資料の収集および実測・撮影等による記録集成に努めているが、これらの土器は当時、比較的資料の乏しかった地域における例として貴重であり、また器形と文様に東海地方の土器の影響が認められる点で注意を惹いた。

東海地方的特徴を示す土器の存在は、南関東地方でそれまでに例が無かった訳ではないが、ほとんど単独出土であり、一般に移入品と理解されてきた。しかし、筆者が昭和30年代前半に試みた県下全域の弥生式土器実測調査結果と当博物館で実施した神奈川県考古資料集成事業第１年度調査によれば、相模川以西の地域においては東海地方的特徴を具備した土器が主体的存在を示し、かつ大部分が模倣品であった。相模湾北西部沿岸の酒匂川流域ではその傾向が殊に強く、従来、南関東地方に包括されていた相模湾北西部沿岸地域には東京湾沿岸地域を中心とする南関東文化圏とは別個の文化圏の存在が考えられるに至った。

こうした情勢下、小糸出土の土器は両地域の接点に当たる個所からの出土例である点、遺跡自体と包含土器を精査する必要を覚えたが、折から藤沢市では西部開発事業が進行中で、小糸を含む大庭一帯は対象区域に掛り既に細部建設計画と諸準備が終了、開発工事着手直前の段階になっていることが判明。工事計画変更による遺跡保存は現実的に難しく、早急に学術的調査を行い、最低限度、遺跡・遺物の記録と資料収集を図らざるを得ぬという事態が生じた。そこで急拠、藤沢市関係当局と折衝を重ねた結果幸い理解と快諾を頂き、昭和45（1970）年８月６日から８月20日まで、延15日間、発掘調査を実施したのである。

上記の事情による期間その他の制約のため所期の目的を十分達成出来たとは言い難いが、弥生時代住居址５軒、同時代の溝状遺構１条を検出、土器ならびに遺跡記録の収集その他につき一応の成果を収めることを得た。以下、調査結果概要と二三の所見を述べると共に牛王重徳氏寄贈土器４点についても紹介し、報告の責めを果たしたく思う。本調査は諸般の事情で報告書刊行が大幅に遅延した。また調査の略報を終了直後に「神奈川県立博物館だより」第３巻第３号（通巻18号）で発表したが、速報のため、資料整理と検討の進行に伴い補足訂正を要する個所が少からず生じているので本稿で訂正する。これらの点は何とぞ御了解を賜わりたい。

小糸遺跡の調査に対しては、牛王父子を始め多くの方々と関係機関より、一方ならぬご協力を頂いた。稿を起すに当たり、改めてお礼申し上げ巻末にご芳名を記るして、謝意を表する。

II. 遺　跡　概　要

（1）位置・旧状（第1図，第2図，第3図，図版1，図版2—(1)）

小糸遺跡は神奈川県藤沢市大庭字小糸3165、3167番地付近を中心に存在したが、大庭霊園建設により消滅、現在、全く痕跡を止めない。かってはＪＲ東海道本線藤沢駅の北北西直線距離約4.2㎞、相模湾に注ぐ引地川の川口から約5㎞溯った地点に残る中世の山城、大庭城の西方に当たり、引地川の支流をなす小糸川の右岸に位置した。この付近で小糸川右岸は標高30ｍ前後の河岸段丘が発達、各所で細い谷が侵食し、北方へ突出した大小の半島状台地が並列する。

本遺跡が存在した台地もその一つで、南北約300ｍ、東西約200ｍ、川面との比高約20ｍ。上面は先端より250ｍ付近まで平坦に近い緩傾斜をなし、漸移的に西側丘陵地帯へ移行する。

遺跡は平坦部末端と丘陵が接する付近に広がり、調査当時ほぼ全域が畑地で、南北約100ｍ東西約50ｍ前後の範囲に土器破片の散布が認められ、第4図に示す農道の西側に多かった。また、以前に土器が出土した地点は西側畑地と農道が接する個所である。こうしたことを考慮のうえ、調査の主対象を農道の西に絞った。しかし、未だ貸地と公団未買収地が混在するほか耕作中の畑も多く、それらを出来るだけ避けて欲しい旨の要請があり、作物補償の面でも限界があるなどして全面発掘は到底不可能であった。その結果止むを得ずトレンチ法を採り、遺構の検出あるいは重要な所見のあった部分について、出来るだけ拡張する方針で臨むこととした。3号・4号・5号住居址が確認のみに止まったのは、かかる事情による。

（2）調査概況（第4図、図版2—(2)　※以下、図版は→で撮影位置・方角を表示）

調査区域は台地平坦部末端から丘陵への移行部付近で、図示したように地表面は台地主軸に従い東へ6～8°・北へ2～4°の緩傾斜をもつ。この部位に第1～第5トレンチと拡張区Ⅰ～Ⅴを設定した。発掘面積、延400㎡。

土層の堆積は比較的傾斜をもつ農道西側の調査地点では一般に薄く、地表から一応基盤と見做せる関東ローム層上面まで35～50㎝程度にすぎない。ただ農道付近から東側では厚さを増しており、台地先端方向へ土砂が流出堆積したとみられる。農道東縁と畑地との間に存在する1ｍ弱の段差は、斜面を帯状に切削して畑を設けた結果であり、段丘ではない。

標準的層序は以下の如くで、堆積程度の差は場所により多少異るが、各層ともほぼ全域に認められた。大体の傾向を第5図、第6図のトレンチ壁面実測図で示す。

表土（耕作土）＝有機物と火山灰が多量に混った黒色に近い褐色土。いわゆるクロボクで、下に堆積する黒褐色土層と基本的に差がない。弥生式土器・土師式土器破片を若干含むが、大半が小断片で磨滅が著しく、型式、器種、器形をほとんど判別し難い。

黒褐色土層＝有機物と火山灰を多量に含んだ黒味の濃い褐色土。上半は密度が低く幾分粗であるが、下半では緊り、土器破片の遺存状態もかなり良好であった。ただし、この層は耕作による損壊が上半部では特に著しく、本来の土層上面をほぼ失い、攪乱は下半部にも相当及んで

いる。第５、第６、第７各トレンチでは竪穴住居址床面の一部が計５個所存在したが、すべて断片的な状態で、明確な規模、時期および他遺構との先後関係の把握が不可能なため、遺存の事実を記すに止めたい。なお、１号～５号住居址覆土の上部ならびに溝状遺構覆土のうち黒褐色土層は、本層下半に比定できる。

暗褐色土層＝暗褐色を呈し、微小な赤褐色火山灰粒を僅かに含む幾分粘質を帯びた土層。比較的堅く、関東ローム層上端軟質部に接する下端ではやや黄味が加わる。全域に堆積するが、攪乱の著しい調査区域西半では部分的に消滅していた。竪穴住居址内覆土のうち床面に接する土層は本層に比定され、安定度が高い。土器破片の包含量も他の層に比べて多く、それらの遺存状態も全般に良好である。遺構以外の部分では、本層に包含されている弥生式土器、土師式土器の比率が、地点により、傾向的に異なるけれども範囲を特定し得るほどではなかった。

暗褐色土層中でも、Ⅰ区とⅢ区で各１個所、竪穴住居址床面の一部が残存していたが、時期他遺構との先後関係その他は全く不明である。

関東ローム層＝黄褐色を呈する火山灰層。上端から20～30cmまでは軟質である。溝状遺構を除き、竪穴住居址床面は最大限その範囲内に止まる。上に堆積する各層が薄いため、随所で耕作による攪乱を受けている。本層については先土器時代遺跡の重複する可能性を考慮し、遺構を避け、各トレンチと拡張区内に平面1.5 m×1.5 m、深さ平均上端より1.5 mまで試掘坑を設定発掘したが、遺物、遺構は認められなかったので、前記条件的制約上、以下は打切った。

Ⅲ. 遺構・出土遺物

遺　構（第４図～第９図，図版３～図版４）

検出した遺構は竪穴住居址と溝状遺構の２種である。住居址は１号～５号住居址と黒褐色土層・暗褐色土層中の床面残部７個を合わせ12軒となるが、後者は時期、規模とも明確でないため記述を省略する。１号～５号住居址は、床面出土土器の型式により、いずれも弥生時代後期後半に属すと認められる。溝状遺構は断面の形状と竪穴住居址との切合関係その他からみて、弥生時代後期末の構築として誤りない。なお、発掘個所内には深ささまざまの畦切溝が各所に存在した。すべて近年のもので、一本は１号住居址床面を抜き関東ローム層上面に達する。

１号住居址（第４図―**Ｄ１**，第８図，図版３―(1)、図版５，図版６）

平面が胴張りの隅丸長方形を呈すると推定される竪穴住居址。主軸方向は北西――南東を示す。床面は関東ローム層上部を浅く掘り凹めた上に貼床を設けたもので、東北側の約半分は耕作により破壊され、消失。また、東南側壁付近が溝状遺構で切られ、床面には畦切溝の底部が走っている。床面は軟弱で汚れが著しい。

推定平面規模、約６×5.5 m。柱穴は４個ほぼ対照位置にあるが直径が小さく、浅い。炉は１個所、平面長楕円形で60×100 cm、深さ最大９cmを計り、断面形はレンズ状を呈するが、末端は鮮明でない。床面は関東ローム層を10cm前後掘込んだ上に貼床を設けたもので、原地形の

形状に従い北東側へ多少傾斜、末端付近では暗褐色土層～黒褐色土層中に貼床した可能性が多い。なお、これらの層にかかる部分の壁は、関東ローム土を貼り重ね、貼床同様の構築法で補強されている（図版３―(1)）。

２号住居址（第４図**D―２**，第９図，図版３―(2)，図版６―**６・10**）

平面が胴張りの隅丸長方形を呈する竪穴住居址。主軸方向は北西――南東を示し、１号住居址のそれと大体一致する。本住居址は北東側の床および壁を完全に失ない、全体に遺存状態が悪いが、ほぼ全体的規模と形状を把握できる。

平面規模、推定6.5×5.5ｍ。柱穴は床面状態不良のため確認できたものは主柱穴４個、補助支柱穴２個。主柱穴の配置は対照的でなく、間隔からみて、北西壁側に２個の存在が推定される。１号住居址同様、柱穴は小型で深さもごく浅い。本住居址もまた建築地点周辺部の傾斜が多少強いため、東半は黒褐色土層にかかる。西側床面部分は関東ローム層まで掘り下げたのち新たに貼床としたもので、東側ではその残土と黒褐色土とを混ぜ合わせた貼床となっており非常に軟弱であった。柱穴が小型で、６個の存在が確実と推定される点は、このような構築法を採らざるを得なかった地形の事情に起因しよう。壁上端は不明である。

２号住居址では、壁に接し４個所、焼土と黒色炭化物を多量に含んだ灰が塊状に堆積、床面も全体に灰と焼土で薄く覆われているほか、一部が火熱により変色していた。本住居址が火災で消失したことは明確である。床面出土遺物は土器破片十数片で型式的特徴に乏しいが、大半に二次的被熱による変質、変色の発生が認められる。床面に密着状態で遺存した土器の特徴から推し、後期中葉の住居址と考えられる（図版６―**６・10**）。

３号住居址・４号住居址（第４図**D―３・D―４**，第６図）

第５トレンチ東端に存在した。平面的にはほぼ同位置に重複する。前後関係は第６図第５トレンチ壁面実測図の如く、３号住居址が明瞭に４号住居址を切って建築されており、同一住居の拡張改築の結果ではない。

床面は、いずれも関東ローム層上部を浅く掘込んでおり、東へ僅か傾斜を示す。４号住居址では、トレンチ東壁から1.5ｍ付近まで、床が２号住居址と同じ構築法による貼床となっていた。３号住居址の場合も、床面を大部分失なってはいるが、推定規模と関東ローム層上面の傾斜度から、東半部が貼床であった可能性が多い。４号住居址には不鮮明な炉址があった。図中の柱穴は３号住居址の柱穴である。出土土器の型式から、両住居址は後期中葉と考えられる。

５号住居址（第４図**D―５**）

第４トレンチ東半に存在した。トレンチ内約４ｍにわたり暗褐色土層中に軟弱な貼床の遺存をみたのみで、末端を失なっている。時期は床面に辛うじて遺存した破片から弥生時代おそらく後期中葉に属すると考えられる。近接する３号・４号住居址との前後関係は把握し難い。

溝状遺構（第４図**VD**，第７図，第８図，図版４―(1)・(2)）

集落址に伴う環濠である。断面がＶ字形を呈し、Ⅰ～Ⅲ区と第１トレンチにかけ帯状に存在

するが、第3トレンチ部分は深耕で破壊されていた。ボーリング探査の結果、本遺構東端は第3トレンチより10m（以東は土層の堆積が厚く確認不可能）、Ⅳ区西端より12mの地点まで、台地の主軸に沿い、やや北へ突出する東西方向の弧を描いて延びていることが確認された。

第4図では、本遺構の形状が確実に把握できた関東ローム層上端以下の部分のみ、示している。実際には暗褐色土層中にも断続的に掘込個所が残存、通常の例からみても上端は暗褐色土または黒褐色土層中にあることは誤りなく、本来の規模は上端で幅2～2.5m、深さ2m前後と推定してよかろう。ただし、Ⅰ区で底部に存在する幅20m内外の平坦状の面がⅡ区・Ⅲ区では消滅する点、西側になるにつれ次第に浅くなる傾向を示す。

なお、横浜市梶山遺跡においては溝内両側面に柵の存在を窺わせる小穴列が検出されたので注意を払ったが、この遺構では検出されなかった。

出土遺物（第6図―**1**・**2**，図版6―**3**～**18**，図版7―**19**～**27**）

土器のみで、1号住居址床面出土の完形土器2例（**1**・**2**）以外、すべて破片である。総量は整理箱（35×45×15cm大）5個分にすぎず、発掘面積に比較しかなり少い。多くは小破片のうえ遺存状態も悪いが、これは堆積土が薄いため再三掘返されたうえ、作物育成の障害となるため排除された結果である。したがって、ここでは時代別に一括説明を加えるに止めたい。

壺形土器**1**――球状に膨んだ胴部から、比較的短小な口辺部が「く」字形に外傾する器形で胴部と底部の境に器体形成時の接合個所が稜となって残る。高24.4cm、口縁直径14.1cm、底面直径8.6cm。器面は刷毛目整形後箆磨きされて光沢を帯び、口頸部には横、胴部では縦に仕上げの箆痕が並び装飾効果の意図が鮮明に伺える。胴部上端部に、下方のみ沈線で区劃した幅5cmの櫛目文様帯がめぐる。施文は上から順次、幅2.5cm先端が9本に分岐した櫛状施文具で、波状文、押引文、押引文的小波状文、波状文と、逆時計回りで行なわれている。底面には大型木葉圧痕があるが樹種は識別し難い。胎土、焼成とも良好で器壁は緊り、淡褐色を呈する。

小型鉢形土器**2**――短い口辺部が僅かに外傾、頸部がややくびれ胴部から底部へ移行する単純な器形を呈するが、胴下半部に器体形成時の接合痕が顕著な稜として残る。高8.4cm、口縁直径11.4cm、底面直径6.7cm。浅鉢形と言える。全体にぶ厚な造りで、底は円板状を示す。胎土に粗砂と小石粒を含むが全面入念に箆磨きされていて、焼成も良く、灰褐色を呈する。

弥生式土器**3**～**27**――壺形土器、台付甕形土器、浅鉢形土器、高坏形土器の4器種が知られる。壺形土器は幾分長頸の器形が多く、複合口縁と単純口縁の例がある。装飾を欠く例もあるが多くは頸部から胴上半部に単純な縄文帯か櫛目文帯がめぐり、両者の比は約6：4で櫛目文の存在が目立つ。器面は一般に箆磨きされるが刷毛目のものも少くない。大部分の土器は胴下半部に器体形成時の接合個所が鈍い稜となって残っており、著しい特徴となっている。櫛目文装飾とこの稜の存在は、東海地方の土器との強い類似を示すものとして注意を要しよう。台付甕形土器は短い口辺部が強く外反する例が多いが、鋭角をなすに至らない。口縁に箆による粗

大な刻目が加えられる場合が多いほか、壺形土器同様、胴下半部に器体形成時の接合個所が稜をなして残る例が少なからずあり、器面には粗雑な刷毛目の付くのが普通である。浅鉢形土器は2個体の小破片のみで詳細は不明である。高坏形土器は**17・18**を代表例として示した。数は少いが、口辺の広がり方と円柱状を呈する脚を特徴とする。特徴を一応示す破片は、いずれも後期中葉～後葉の所産と考えられ、前者が多い。なお、相当数の破片に二次的被熱痕を認めた。

土師式土器――総体に遺存状態が悪く、図示し得る例を欠く。器種は広口壺形土器、坩形土器、甕形土器、高坏形土器の4種を確認したが詳細は不明である。ただ、壺形土器、坩形土器には、明らかに胴下半部に稜を有する例があった点を指摘し、以下、記述を省略する。

IV. 調査前出土土器

第10図・図版8－**A**～**D**の4例で、**A**は弥生式土器，**B**～**D**は土師式土器である。

壺形土器**A**――口縁部の大半を欠く他は全形を保つ。高21.8cm、口縁直径推定約12cm、底面直径8cm。口辺部が多少外反、短い頸部から緩かに球状の胴部へ移行する器形で、胴下半に胴部と底部の接合個所が稜となって残る。この土器は二次的被熱を受け器面に剝落が多く、胎土中の粗砂が露出して粗面をなし、損傷は下半部に著しい。色調は灰褐色ないし淡褐色を呈するが焼成は良い。外面は刷毛目整形後、粗く篦磨きされ、頸部にはその上に幅5cm前後の櫛目文帯がめぐる。現状では粗面化し、櫛目文の種類、文様構成は不明である。内面は口縁から頸部までの間に横位の刷毛目痕がある。本例は諸特徴からみて後期中葉（弥生町式土器・千代式土器）の所産と考えられる。

壺形土器**B**――きわめて小型の壺形土器。完形。形成は輪積みであるが手指調整度が多いため器体の歪みと器面の凹凸が著しく、手捏土器に近い外観をもつ。高7.3cm、口縁最大直径7cm、胴部直径8cm、底面直径5cm。安定性に富む。短い口辺部が僅か外傾、胴部との接合個所は「く」字形に折れ、胴上半は幾分尖り気味の鈍い稜をなして肩状に張り出す。底部との境に器体形成時の接合個所があり、この部分は更に粘土帯をめぐらせて補強してあり鈍い稜となっていて、胴部側面形は算盤玉状を呈する。底はぶ厚い円板形で浅い上底となっている。粘土帯の貼付による補強は口縁にも加えられ、その結果、口縁が複合口縁状を呈する。器面は焼成時のそれとは明瞭に異なる黒ずんだ変色を示し、二次的被熱による焼け炸ぜが各所に発生している。この損傷は識別容易である。また、器面には部分的に目の細い刷毛目整形痕を残すが、全体に篦磨きされている。胎土中に小石粒と微小な雲母片を含み、現状における色調は黒褐色に近いが本来の焼成は良好で、器壁の緊りは強い。時期は五領式土器の新しい部分または和泉式土器に比定できよう。ただ、伴出した坩形土器**C**の特徴からみて、後者の可能性が多い。

坩形土器**C**――上底風の小さな平底をもつ坩形土器。胴下半部の相当部分と底部の大半を失なってはいるが、全形を十分察知し得る。高12.9cm、口縁直径16.3cm、底面直径推定約5cm。口辺部は多少内湾傾向を示し僅かに外傾、胴部最大幅は上位にある。口辺部と胴部の間が外面

では幅約2cmのくびれとなり、形ばかりの頸部を形成する。胴部と底部の接合個所は鈍い稜を示す。本例も二次的被熱のため、全面に斑紋と微小な焼炸ぜが多数生じており、特に外面片側に著しい。器面は内外面とも刷毛目整形後に篦磨きされ、外では縦に細い密接した篦痕が並列し、滑面となっている。現状においては被熱のため損傷変色が目立つが、胎土は比較的良好であり焼成も十分と推定される。時期は古墳時代前期、五領式土器の新しい部分か和泉式土器に比定できよう。

広口壺形土器D――甕形に近い小型広口壺形土器。完形。高18.5cm、口縁直径16.5cm、底面直径8cm。短い口辺部がやや外傾、直立気味の頸部から胴部へ漸移する器形で、胴部中位に最大直径があり、底面に丸味をもつが安定は良い。器面は内外とも刷毛目整形後、十分に篦磨きされ、外面では細い篦痕が縦に密接、全体に滑面を呈する。胴部と底部の接合個所は、ごく鈍い稜をなしている。内外両面は、二次的被熱を受けた形跡が明瞭で、大小の斑紋と焼炸ぜが生じ、片側は原状を著しく失い、また口縁の約二分の一に小さな欠損が連続、鋸歯状を呈する。胎土中に多量の粗砂を含むが、火熱を受けた割には遺存状態良好と言える。時期は器形その他の点からみて、B・Cと同じく、五領式土器の新しい部分か和泉式土器に比定できよう。

以上に述べた4例は、断面V字形を呈する溝状遺構を埋める黒褐色土層上部に埋没、相互に近接して存在したというが、時期的には弥生式土器1例、土師式土器3例に区分される。そのうち、土師式土器3例は諸特徴より五領式土器の新しい部分、または和泉式土器に比定可能である。また、出土位置ならびに3例に認められる二次的被熱の原因は住居火災によるものとみて誤りない点、同一住居址内に遺存した一括資料と見做し得よう。なお、弥生式土器1例にも同様な被熱の痕跡が認められるが、別の火災によるもので、被災後、溝状遺構中に転落埋没し偶然至近距離に遺存したにすぎず、土中で前者の火災の影響を受けた結果とは考え難い。

V. 調　査　所　見

本調査の結果、弥生時代後期に属する竪穴住居址5軒、同・溝状遺構1条および時期不明の住居址（最少限）7軒を検出し、うち弥生時代竪穴住居址2軒と溝状遺構をほぼ構造・規模を察知し得る程度発掘、弥生式土器完形品2と破片少数を収集した。満足すべき程の成果ではないが、調査時の事情から止むを得ぬところである。しかしながら、今後地域研究を進める上で参考になる貴重な所見が幾つか知られたので、以下、項目別に総括的に記すことにする。

竪穴住居址については、1号住居址、2号住居址に明瞭に認められた関東ローム層上部の軟質部を一たん掘込んだのち、貼床を新に設ける構築法と貼床に似た関東ローム土を使用する壁面の補強手法が挙げられる。特に、後者は注目すべきものであり、従来、一般に黒土層の堆積が厚い本地域においては、住居址床面が黒土層中に存在する場合、壁も当然黒土層中にあるため識別が事実上不可能な場合が多いところから床面の推定末端部を以って住居の範囲と見做す

傾向があったが、こうした構築法についても一応注意を払う必要があり、特に急斜面に存在する住居址の場合に言える。次に2号住居址の火災に関連し、牛王氏発見土器Aと I 区周辺出土土器破片中に被熱の痕跡を残す例が多く、かつそれらの型式が一致する点、同一時に発生した火災に遭ったものである可能性が高いと言えよう。

土器については、本調査では弥生式土器（後期＝千代式土器・諏訪ノ前式土器）、土師式土器（古墳時代前期＝五領式土器新～和泉式土器）のみで、うち諏訪ノ前式土器と土師式土器は破片個数が少なく、良好な例を欠き詳細不明である。しかし問題の弥生式土器は、大半が千代式土器に比定し得るものであり、器体形成時の胴部と底部の接合個所が稜をなし、櫛目文装飾を始め、相模湾北西部沿岸の土器との共通性が強く、東京湾沿岸地域の土器とは明らかに異なる様相を示す。相模湾沿岸文化圏中心部の相模川以西――特に酒匂川下流域一帯――の土器と比較した場合、幾分相違した点はあるものの、東京湾沿岸地域に近接した地域でありながら東海地方的色彩が強く、単なる文化圏の接点をなす地域の様相と理解して良いか否か検討の余地があると思われる。この傾向はB～Dの土器でも判るように、土師式土器にも継承される。

逆に集落立地は南関東全般の場合と同様に台地上であり、酒匂川下流域では中期中葉には既に低地へ集落が進出、後期には一般化するのと対照的で、この状況は藤沢市域一帯と周辺部の集落立地と共通し、土器の様相と共に更に検討しなければならないところである。

集落構造に関しては、本調査では具体的な問題は把握できず、僅かに弥生時代後期に環濠が設けられている事実を知り得たに止まった。

VI. 結　　語

小糸遺跡の発掘調査結果の概要ならびに所見は以上の各項に述べたとおりである。理想的体制の下で広範かつ綿密な調査を実施することが不可能であったが、従来比較的調査例の少なかった藤沢市内でも西部地域の記録を増やせたのは貴重な収穫と言える。

藤沢市を含む相模湾北東部沿岸地域は、東京湾沿岸文化圏と相模湾北西部沿岸文化圏の接点として重要であり、今後その文化様相について一層の解明、把握が必要である。具体的には相模川以東の沿岸部と言ってよい。このことは、弥生時代後期に出現する各地方の小文化圏の成立、発展との関連において重要である。

そうした動向の一端を反映するものに、後期に入って急増する東海地方系弥生式土器（直接移入品・模倣品）が挙げられよう。神奈川県域のみならず、近年発見例数が著しく増加し、東京都西部、埼玉県内でも存在が知られている。その伝播経路の主要なものの一つに相模川流域を北上する道筋が想定され、この点にも併わせて注意する必要があることを指摘して、本稿を終える。

調査終了後、早くも18年が過去った。その間に小糸遺跡調査の功労者である牛王貞雄、重徳

のお二人は、不幸にも病のため他界され、この報告書を御覧願うことが叶わなくなった。誠に痛恨の極みである。慎んで御冥福をお祈り申し上げる。

また、本調査の契機をもたらした川口徳治朗氏は、直前に公務中負傷して発掘に参加出来なくなったが、故牛王重徳氏の御協力を得て無事終了したことを併わせて付記する。

関係文献

(1) 赤星直忠 「各地域の弥生式土器・南関東」日本考古学講座4 弥生文化 河出書房 昭和30（1955）年.

神澤勇一 「東海地方系の弥生式土器」神奈川県立博物館だより 1巻3号 昭和43（1968）年.

(2) 神澤勇一 「弥生文化の発展と地域性・関東」日本の考古学Ⅲ 弥生時代 河出書房新社 昭和41（1966）年。

(3) 神澤勇一 「神奈川県考古資料集成1・弥生式土器（1）」 神奈川県立博物館 昭和43（1968）年.

(4) 神澤勇一 「相模湾沿岸地域における弥生式土器の様相について」神奈川県立博物館研究報告（考古・歴史・美術・民俗） 1巻1号 昭和43（1968）年.

(5) 神澤勇一 「梶山遺跡（1）」神奈川県立博物館発掘調査報告書 第1号 昭和43（1968）年.

(6) 川口徳治朗「藤沢市大庭小糸出土の土器」湘南考古学同好会々報7昭和57（1982)年.

(7) 神澤勇一 「足柄上郡山北町堂山出土の弥生式土器」神奈川県文化財調査報告 27集 神奈川県教育委員会 昭和37（1962）年.

(8) 八王子市郷土資料館編（小川貴司、他）「三～四世紀の東国」八王子市郷土資料館特別展図録 八王子市教育委員会 昭和58（1983）年.

(9) 田村言行 「弥生時代後期における南関東の動向」どるめん 23号 ＪＩＣＣ・出版局 昭和54（1979）年.

(10) 熊野正也 「佐倉市・臼井南遺跡出土の後期弥生式土器の意味するもの」ＭＵＳＥＵＭちば――千葉県博物館協会研究紀要――第9号 昭和53（1978）年.

(11) 深澤克友 「土器の伝播と接触交渉」どるめん 23号 ＪＩＣＣ・出版局 昭和54（1979）年.

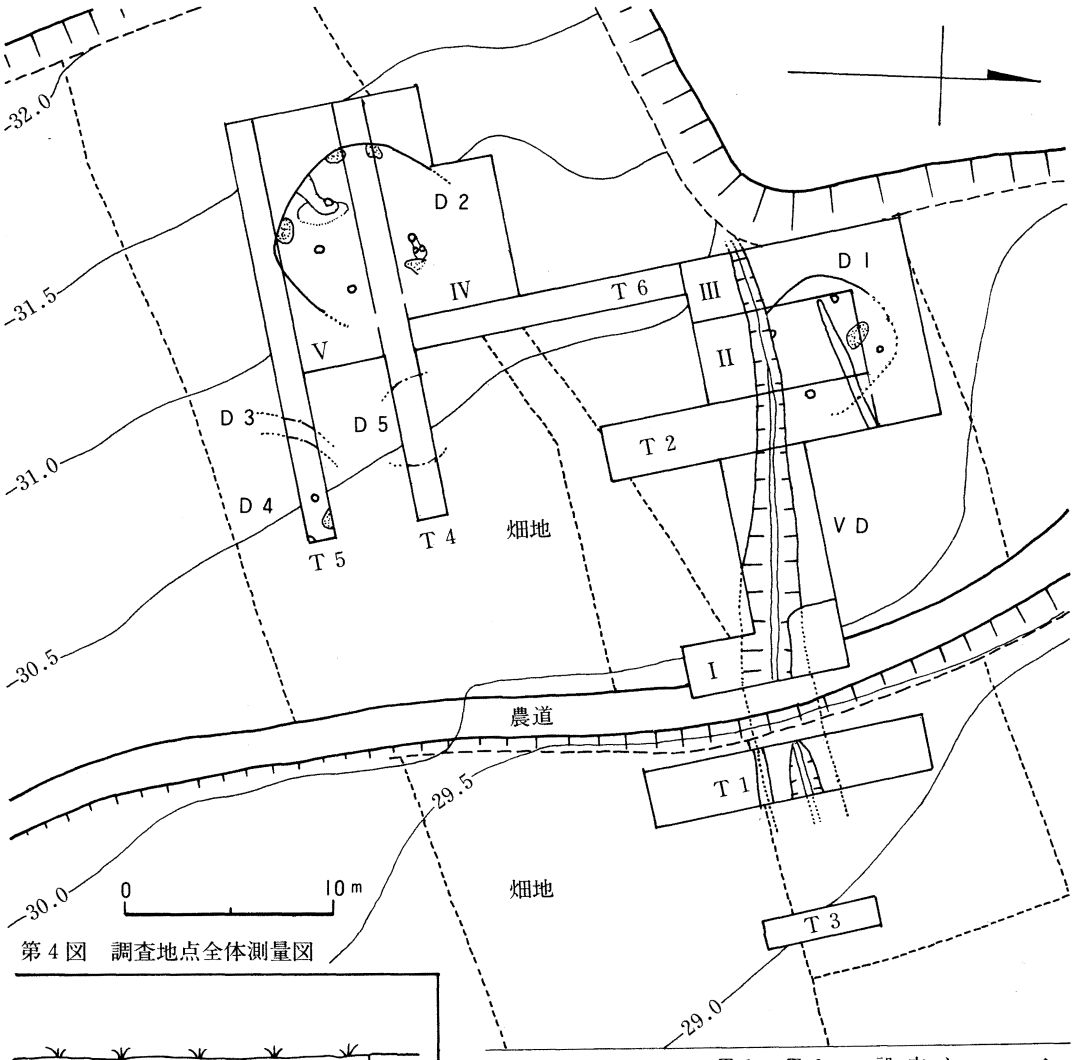
関係協力者（敬称略・順不同） （順不同・敬稱略）

牛王貞雄，牛王重徳，川口徳治朗，湯山学・藤沢市公共土地公社，藤沢市教育委員会，藤沢警察署・杉原荘介，大塚初重〈明治大学考古学研究室〉・松尾宜方，松村恵司，石田広美，玉林美男，宮崎貴夫〈明治大学〉・盛田精治〈鎌倉学園高〉・中野萬年，井上久美子・小山裕之.

第１図　小糸遺跡周辺地形図（昭和45年）

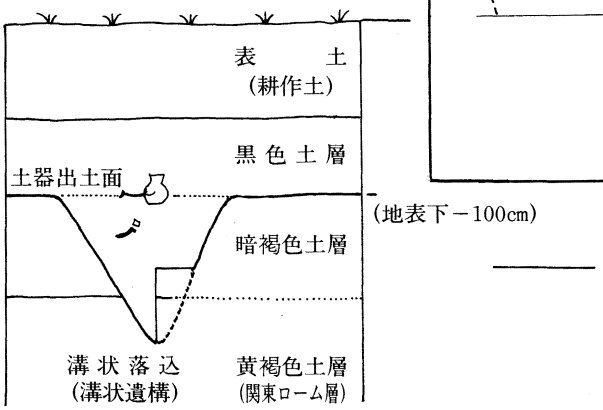
第２図　遺跡周辺地形現状

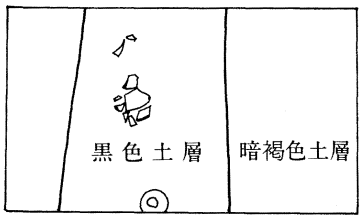
第３図　遺跡位置概念図



第４図　調査地点全体測量図

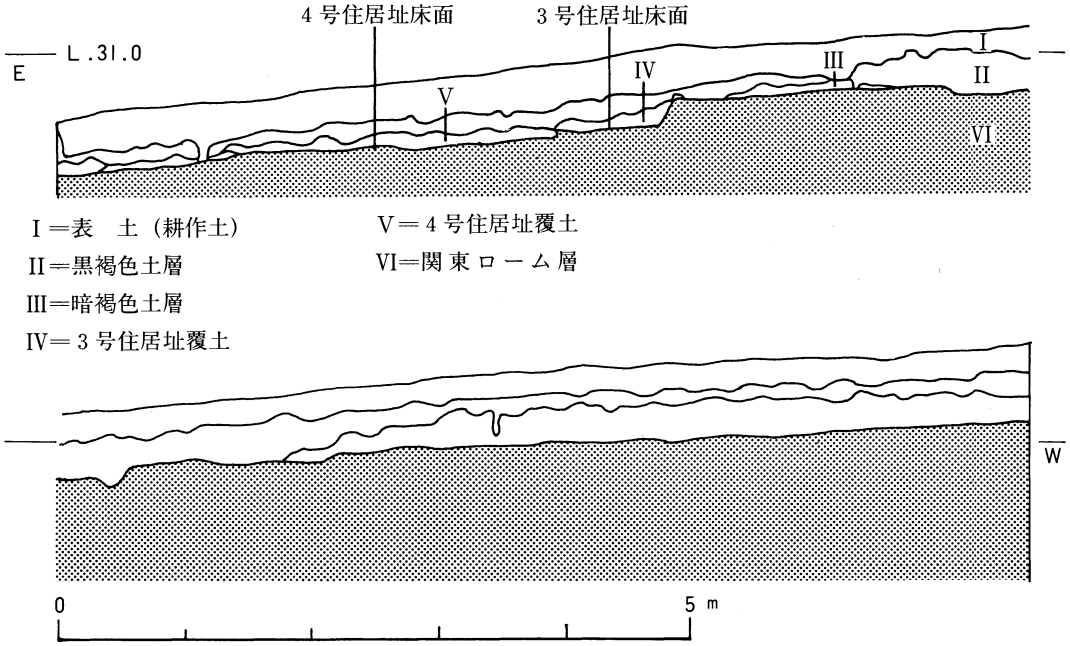
T１～T６……設定トレンチ
I　～　V……拡張発掘区
D I ～D５……竪穴住居址
V　　D……溝状遺構
29.0～32.0……標高（0.5m間隔）





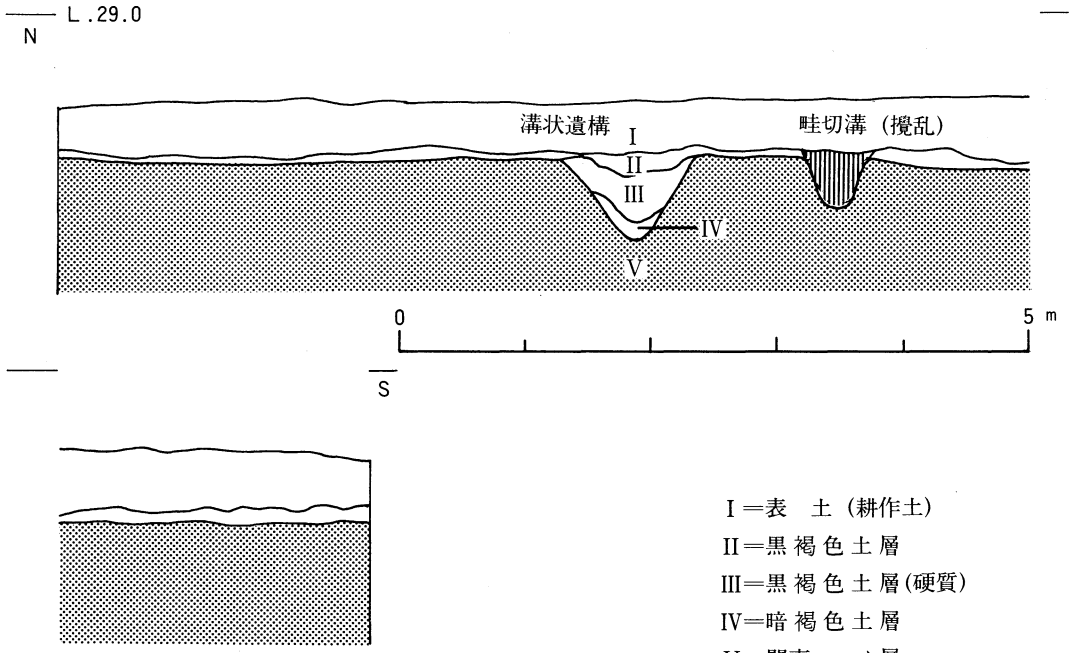
(地表下 約－100cm面．平面図)

第５図　調査前土器出土状態略図（牛王・川口）



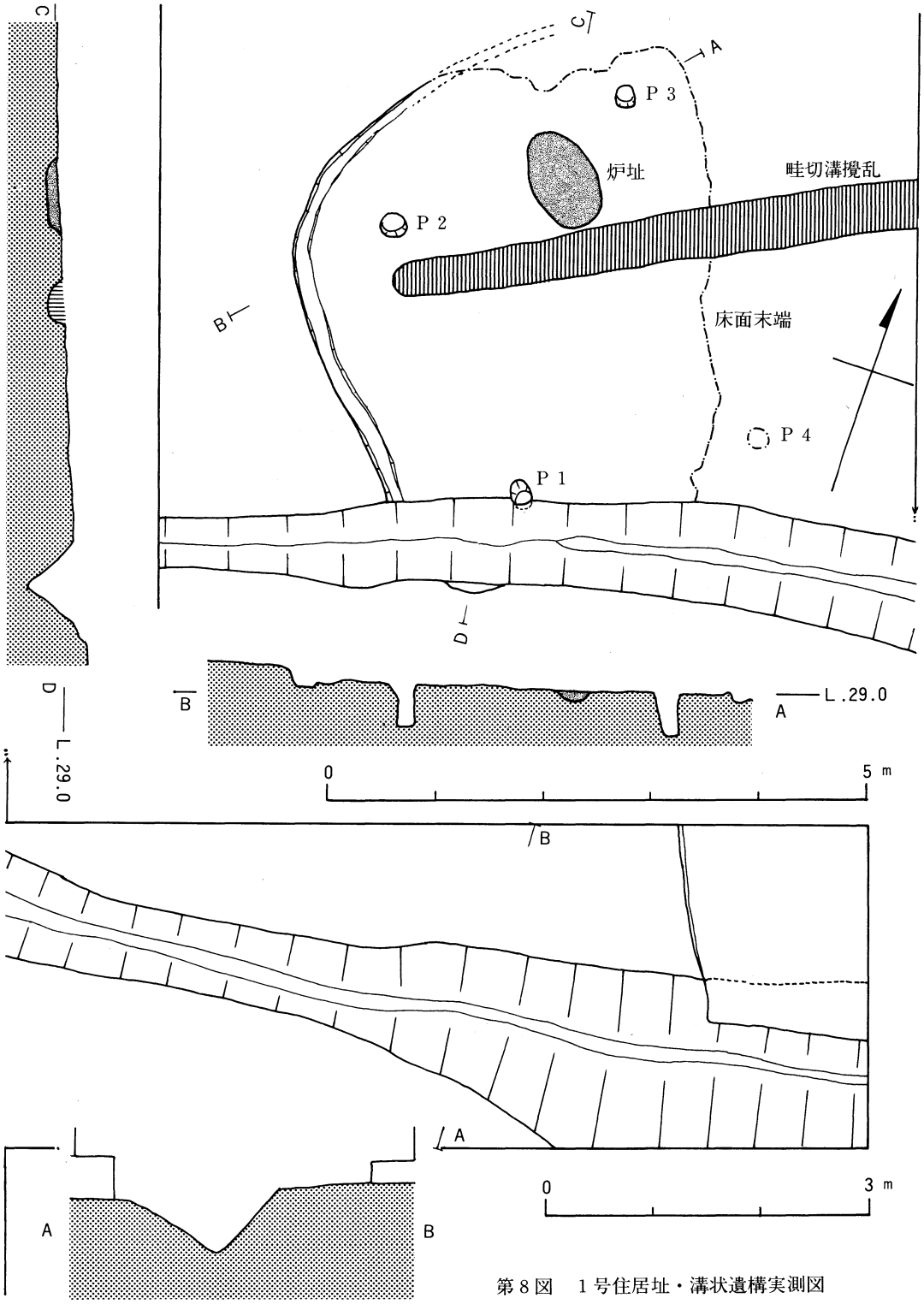
I＝表　土（耕作土）
II＝黒褐色土層
III＝暗褐色土層
IV＝3号住居址覆土
V＝4号住居址覆土
VI＝関東ローム層

第6図　第5トレンチ（T5）南壁面実測図
（T5東端 → 15.0m地点）

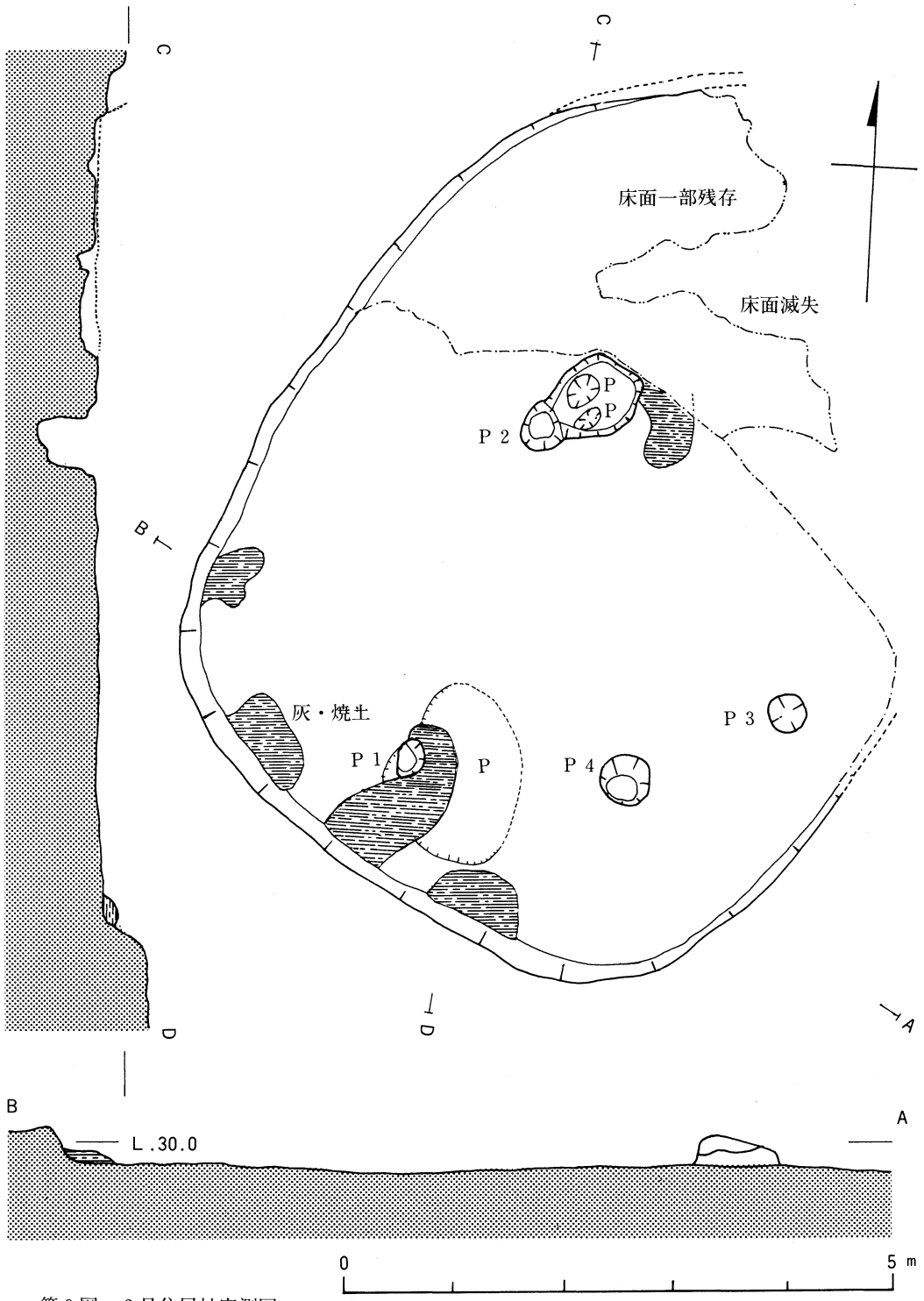


I＝表　土（耕作土）
II＝黒褐色土層
III＝黒褐色土層(硬質)
IV＝暗褐色土層
V＝関東ローム層

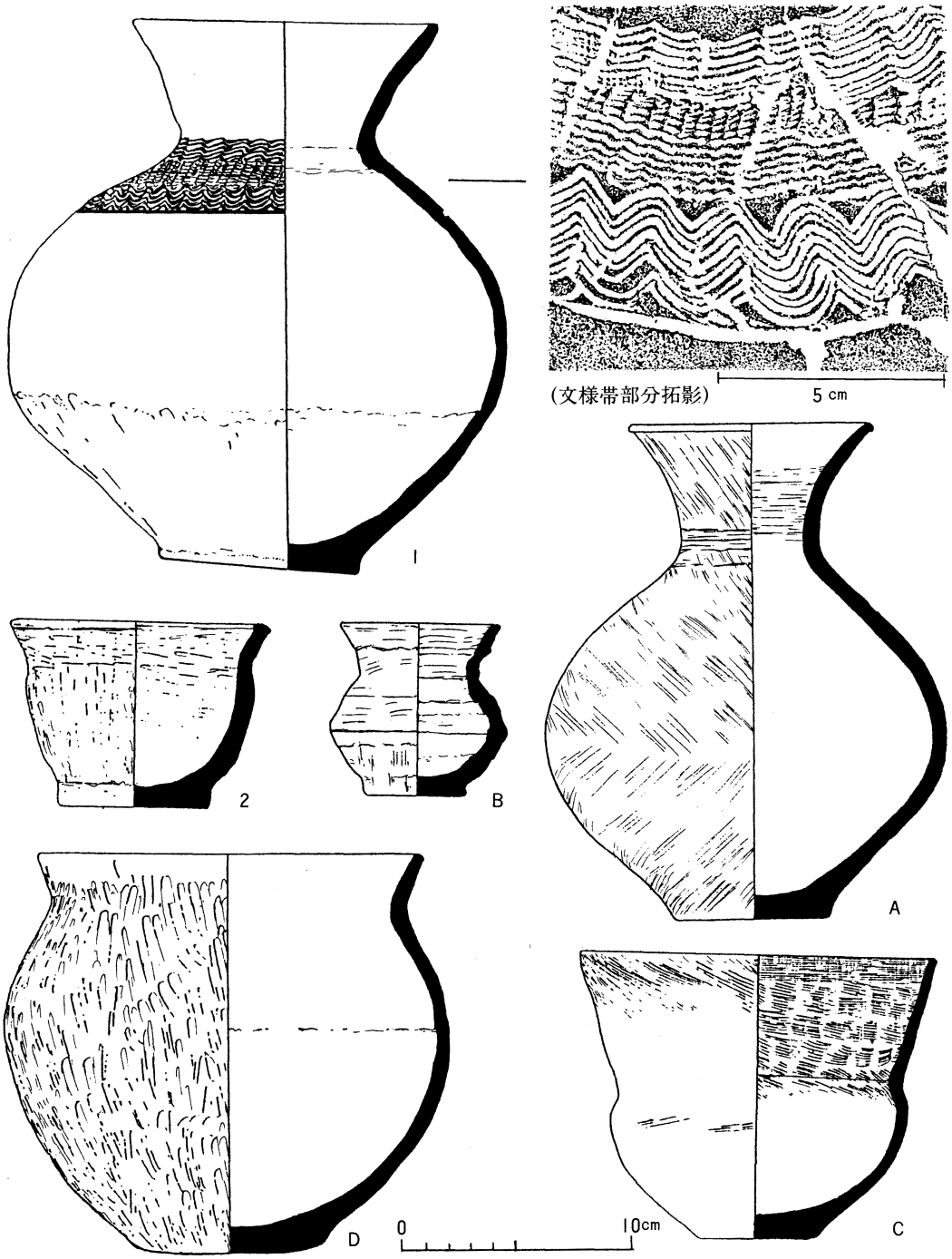
第7図　第1トレンチ（T1）東壁面実測図



第８図　１号住居址・溝状遺構実測図



第９図　２号住居址実測図



第10図　土器実測図　　縮尺１：３

出土位置：１＝１号住居址　２＝１号住居址　Ａ～Ｄ＝溝状遺構覆土

時　　期：弥生時代後期＝１・２・Ａ　古墳時代前期＝Ｂ・Ｃ・Ｄ

Ａ～Ｄ＝発掘調査前出土例

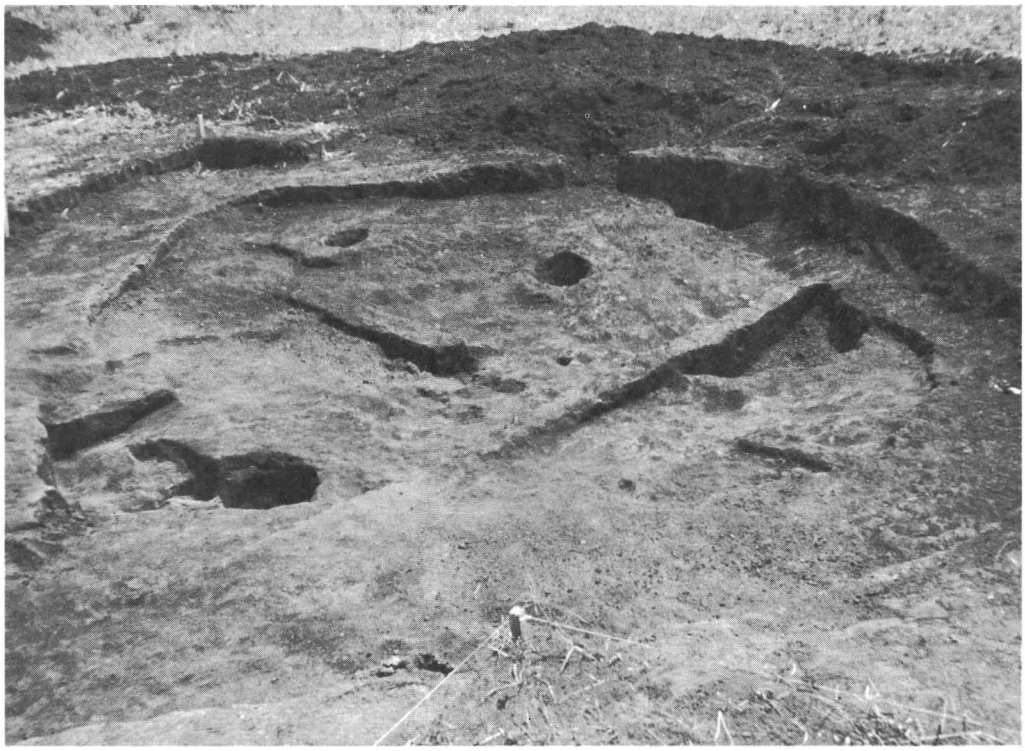
小糸遺跡周辺地形（昭和43年）　中央白円内＝遺跡

藤沢市西部開発事務局提供

(1) 調査地点全景〈T 5 南西端付近 → 北東〉

(2) 発掘調査状況〈2 号住居址付近，T 5 西端 → 北東〉

(1) 1号住居址（手前＝溝状遺構）〈II区南東角 → 北西〉



(2) 2号住居址〈IV区南東角 → 南西〉

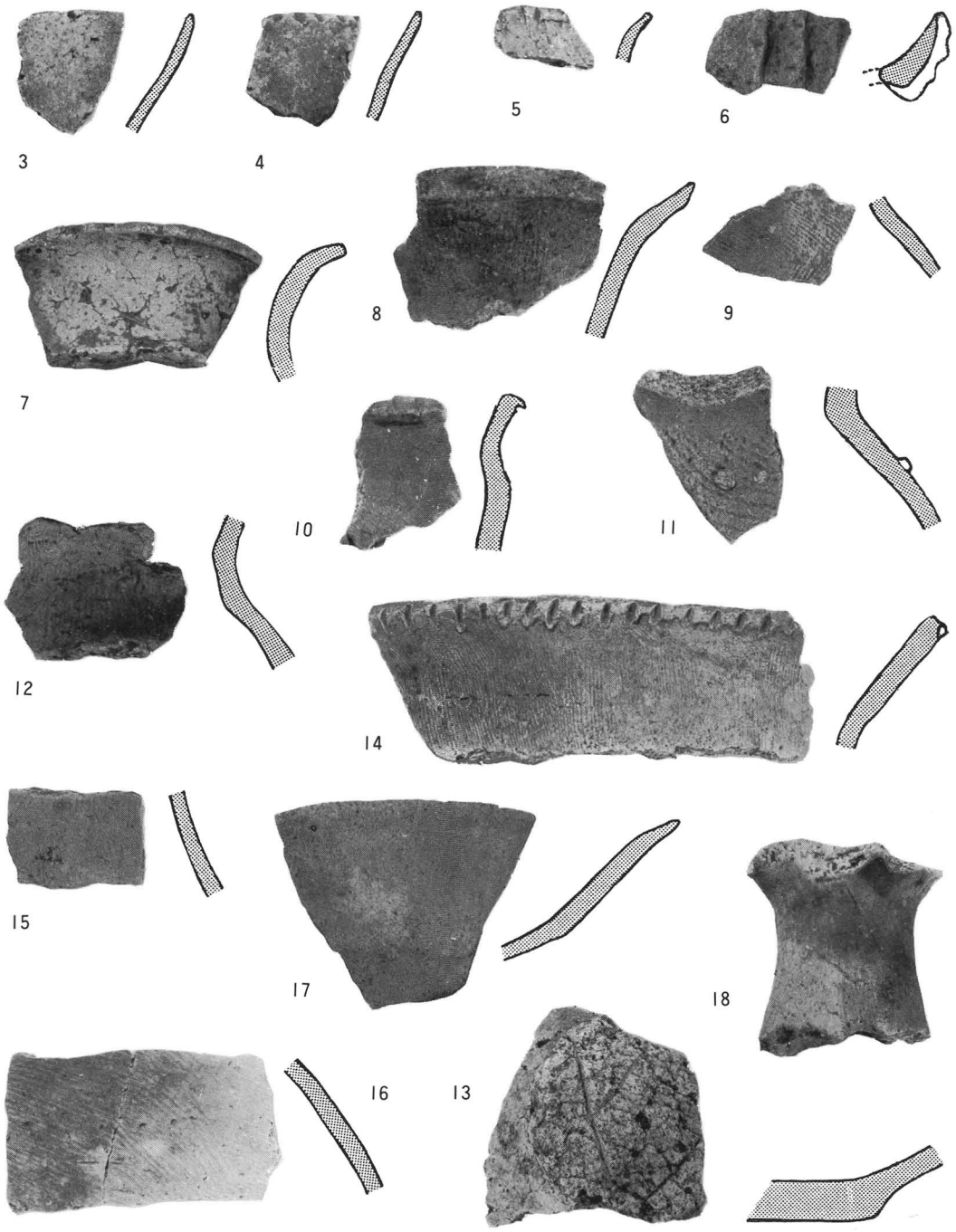
(1) 溝状遺構（右上＝1号住居址）〈II区東端中央 → 西〉

(2) 1号住居址・溝状遺構切合状態〈II区西端中央 → 南東〉

1．壺形土器
(H＝24.2cm)
弥生時代後期
1号住居址出土

2．小型鉢形土器
(H＝8.1cm)
弥生時代後期
1号住居址出土

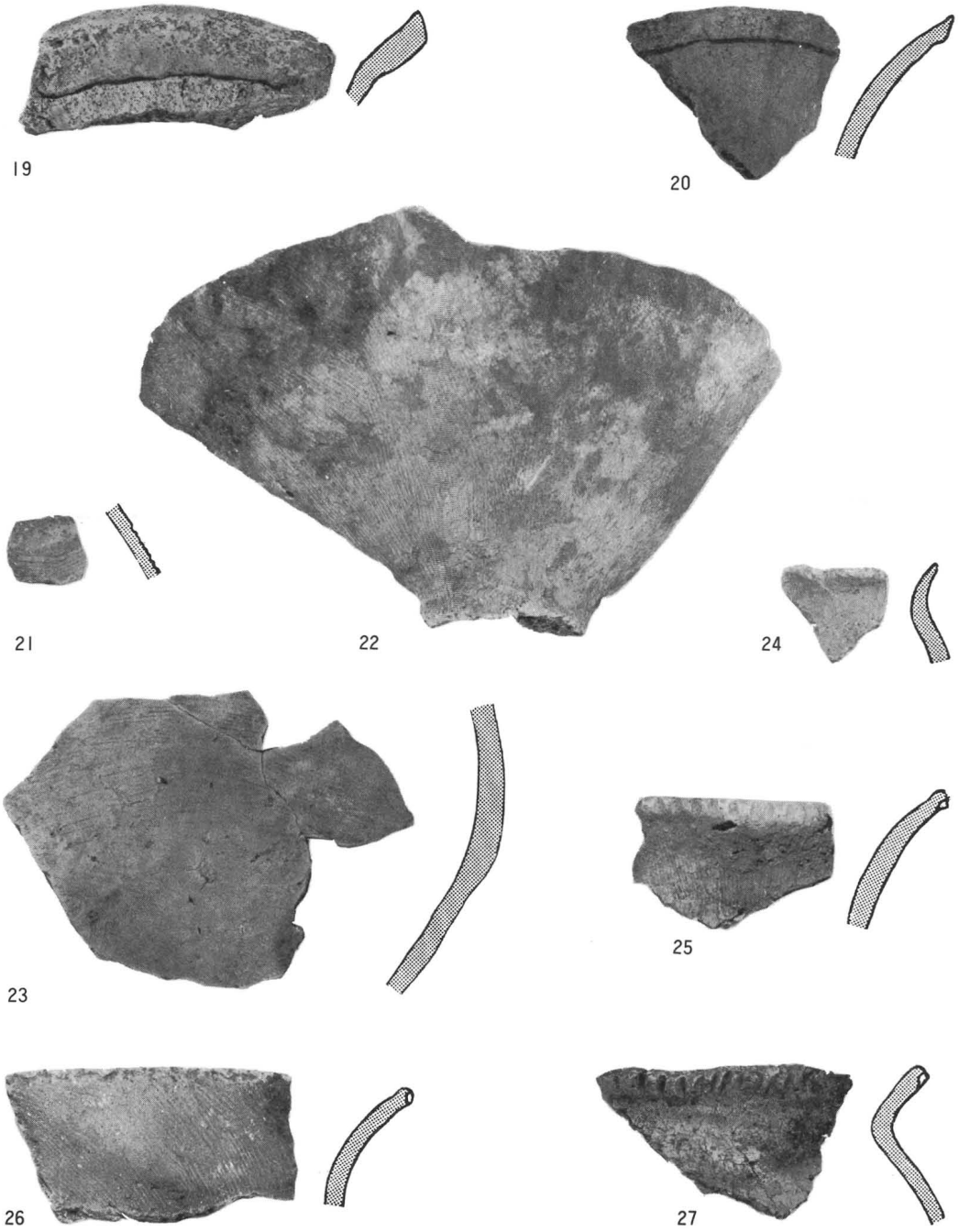
土 器 (1)



土 器 (2) 弥生時代後期　　縮尺＝約１：２

出土位置：１号住居址＝４・５(暗褐色土)，３(黒褐色土)，２号住居址＝６・10(床面)，９(暗褐色土)，７・８(黒褐色土)．溝状遺構＝11～14・16～18(暗褐色土)

器　　形：壺形土器＝３・６～９・11～13．鉢形土器＝４・５・10・14～16．高坏形土器＝17・18



土 器 (3) 弥生時代後期　　縮尺＝約 1 ： 2

出土位置：1号住居址＝23(床面), 21(黒褐色土). 2号住居址＝19・25(黒褐色土). 溝状遺構＝22・27(黒褐色土). 黒褐色土層＝20. 表土(耕作土)＝24・26.

器　　形：壺形土器＝19～21・23. 鉢形土器＝22・24～27.

A

C

B

D

土 器 (4) 寄贈資料（弥生式土器・土師式土器）　　縮尺＝不定

A．壺 形 土 器　弥生時代後期　H＝21.5cm

B．小型壺形土器　古墳時代前期　H＝6.8cm

C．坩 形 土 器　古墳時代前期　H＝12.2cm

D．広口壺形土器　古墳時代前期　H＝18.0cm

神奈川県立博物館発掘調査報告書
第 17 号

昭和63年3月30日 印 刷
昭和63年3月31日 発 行

編集兼発行者 神 奈 川 県 立 博 物 館
館長 加 藤 整 爾
横浜市中区南仲通り5—60

印 刷 所 東 邦 印 刷 株 式 会 社
横浜市南区高根町3—18